
CLOVER

双葉 藍

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CLOVER

【Nコード】

N4160A

【作者名】

双葉 藍

【あらすじ】

未来の見える少女と病弱だが心の優しい少年、そして彼の幼馴染の夢を追い駆け続けている少年が主人公の心温まる(?)少し恋愛も絡めた(!?)ほのぼのストーリー・・・を目指します！

プロローグ 雨と笑えば

四葉のクローバーは本当に幸せを運んでくれますか？

雨が窓を叩く音が聞こえる。ジメジメするしべとべとするし、だからこの時期の雨は嫌いだ。だが彼はわざわざこの家に来た。どんな理由かは・・・少し見当がつく。

「俺、もうすぐ・・・死ぬんだろ？」

やっぱり・・・

「・・・」

「いや、俺だってこんな話したくねえよ。でも・・・お前には・・・」
雨足が強くなり、窓を叩く音が大きくなる。

「ええ。確かにあなたはもうすぐ死ぬわ。私の未来予知能力に、狂いは無いから・・・」

ここまでこの能力に嫌悪感を覚えたのは、今が初めてだった。それにこんなことを齒に衣着せぬ言う私を、彼らは今までどう思ってたのだろう？と思うとホントに自分が嫌になる。

「・・・ごめんな。あんなこと言わせて。本当は言わないって約束してたのにな。破らせちまったな。ホント・・・ごめん」

そう言って温かく私のことを抱きしめる彼がとても愛しい。謝りたいのも、感謝したいのも私だって同じなのに・・・先に言われてしまった。だから私も抱きしめ返した。彼がここにいるということ、この事実を、しっかりと心に焼き付けたいから。

「ご・・・ごめんなさい・・・」

雨の音がどんどん弱くなる。早く晴れてまた暑い日差しが降り注げばいいのに。

「何泣いてんだよ？そんな哀しむことじゃねえって」

・・・私が泣いてる？そんな・・・泣きたいのは彼の方だろうに。勝手に未来を見て、それを告げて・・・終わり。何て私は無力で、身

勝手なのだろう・・・こんな能力さえ無ければ、誰も辛い思いはしなかったのに・・・

「じゃあ俺は帰るからな。いつまでもメソメソしてんじゃねえぞ」
無理して笑っているのがありありと分かる。笑顔がとても綺麗な彼を変えてしまったのはきつと私。

「あつ、そうだ！アイツには絶対言うなよ！心配すぎて向こうが倒れかねないからな」

と念を押されてしまった。私と彼とがした初めての約束。もう7年も一緒にいるのに、初めての約束がこんなことだなんて虚しすぎるけど・・・少し嬉しい。

「分かったわ。じゃあ指切りね」

ハイッと小指を差し出す。彼のポカーンとした顔がとても面白い。珍しく私が子供っぽいことを言っただからだろう。

「・・・そうだな」

そして指切りをして帰ろうとすると、空には虹が

神様がこの虹を架けてくれたのかもよと言うと、彼は片方の口角だけを上げてニヤツと笑った。

「そんな小粋なことを神様がするもんかな？きつと・・・四葉のクローバーが、少しの幸せ気分を運んでくれたんじゃない？」

そう言っただけのピアスに軽くキスをし、赤くなっている私を他所に笑いながら帰って行った。

わざと水溜りに足を入れたりして、子供っぽい行動をとる彼が7年前のあの日と重なって見える。

そう私が私になれたあの日に

ブログ 雨と笑えば（後書き）

初投稿作品です。いろいろおかしい部分もあるかもしれませんが、あまり気にしないで下さい。これからはずっと明るくするつもりなので楽しんで頂ければ幸いです。

Leaf 1 出会いのかけら

大切な人と一緒だと幸せなのですか？

お線香の香りと時折吹いてくるヒヤツとする風で私は夢から覚めた。こんな時に何で未来の事なんかが見えたのだろう。今が一番大変な時なのに……。しかも覚えているのは、知らない男の子と晴れ渡った空と……

「大丈夫？気分悪いの？波香ちゃん」

隣に座っていた伯母さんが声を掛けてくれた。

「あつ、いえ……。大丈夫です。すこし貧血っぽいだけなんで」

「そうなの……。もう少しで終わるだろうから、もうちょっと我慢してね」

そうニコツと笑いながら伯母さんは言った。

この前の日曜日、私の両親は死んだ。

「波香も大きくなったし、一人で留守番だって出来るよね？」

母が突然そんな事を言うもんだから何事かと思った。だが

「明日はお母さんとお父さんの結婚記念日なの。だから二人で旅行したいな」なんて思っただけど……。良い？」

とこっちの心配をよそに母はこんな事を言っただけだ。たとえばダメといつても行くんだらうから、仕方なくOKした。

「まったく……。いつまで新婚気分にいるつもり？」

呆れてしまったので一応聞いてみた。すると母はフツツと小さく笑ってから

「死ぬまでよ。だって結婚って大切な人とずっと一緒にいられてることよ？コレの以上の幸せなんて無いわ。お母さんはお父さんと一緒にいられてホント幸せだよ」

そして鼻唄交じりに荷造りを始めた。だがその夜の夢でうつかり見

てしまったのだ。母の未来を・・・急に目の前でバスが崖から落ちていく映像がなんて、非現実過ぎて信じられないから、てつきり映画か何かの１シーンが夢に出てきたのだと思った。でもそれが本当に未来のことだったなんて・・・何せ二人が帰りに乗ったバスが、本当に転落事故を起こしたのだから。二人とも打ち所・・・というより座った所が悪かったのか、すぐに息を引き取ったらしい。

まさか一瞬にして二人の大切な人を亡くすなんて・・・一応知っていたといえばそうだが、自分だって信じられなかったのだから結局、意味はない。自分がこんな目に遭うなんて思ってもみなかったし。

願ったって二人が帰ってくる訳じゃないんだからとは思うが、出来ることなら、もう一度だけ会って・・・幸せな人生だったかを聞きたい。でも本当に大切な人と一緒だったからきつと幸せだったんだろうなあ。

時間がいつの間にか経っていて、今はもう葬式の後の昼食タイムになっていた。私は部屋の隅っこでボーっとしていたが、やはり居心地が悪く、トイレで時間を潰して帰る頃になつたらまた出てこようと思い、しばらくトイレに閉じ籠っていた。すると急に眠気が襲ってきてしばらくの間眠ってしまった。ざわざわと人の話し声が聞こえてきて、私は慌てて起きた。

「・・・波香ちゃん・・・」

と私の名前が聞こえてきたので、もしかしたら中々トイレから出てこない私を心配しているのかもと思い、出て行こうとしたが

「誰が引き取るの？」

全くの逆だった。私の事なんてちっとも心配していなかった。しているのは自分達の心配。

「私のところは無理よ。育ち盛りの息子が３人もいるんだもの。あなたは？」

「すみません、お姉さん。うちだってやっと上の子が小学校に上が

「ったんですよ」

その後もみんなで私の事を押し付け合っている。でも最後にさつき声をかけてくれた伯母さんが始めて口を挟んだ。

「もう。みんなしょうがないわねえ」

やっぱりこの人は良い人だと思った。さすが母のお姉さんとまで思った。が、

「だったら何処かに預かってもらいましょうか」

むやみに希望を持つと逆だった時のショックは・・・相当なものとなる。

「そうですよねーアハハハハハハハ」

悔しくて涙も出て来ないし、耳を劈くような酷い笑い声に気分も悪くなってきた。どうして不幸がこんなに一編にやってくるのだろう・・・

この時、私はもう二度と幸せになっではいけないんだと、確信した。

オバサン達が全員居なくなってから私はゆっくりとトイレを出た。部屋に戻ってアノ人達の顔を見るのは嫌だったけど、帰らねばもつと迷惑がかかると思いトボトボと戻っていた。すると部屋の中から大声が聞こえてきた。何事かと思い、走って行ってドアを開けると

「・・・壁？」

と見紛うぐらい目の前に真っ黒いコートを着た外国人張りの背の高さの人が佇んでいた。

「ん？・・・あゝ！！！！！！」

最初は背が高すぎたのか私の事に気付かなかったみたいけど、見つけた途端に人の事を指さして大声で叫んだ。

「君が波香君か！！いやあゝホントに水希君にそっくりだ！！」

「水希って・・・お母さんのことですか？」

「ああそうさ！結婚式で見て以来だけど、そのままだな。きっと君も美人になるぞ！」

見たことも無い男の人だし、髭がぼさぼさで年も分からないけど、ニカッて笑った時の顔がすごく・・・懐かしい感じがした。そして「よし！やっぱりこの子は俺が引き取る！」

と突拍子も無いことを言い出した。

「は？」

思わずこの場にいた全員がそう言った。

「止めとけ！お前なんか子供が育てられるはずが無い！」

「そうよ！途中で捨てたりなんて出来ないのよ！」

そんなに信用されてないんだこの人・・・と思うすっかりジトツとした目で見ってしまった。

「・・・分かってるよ！そのぐらい。でも・・・つか、だからこそ俺が引き取るって決めたんだ！！」

今、この人も何だか雰囲気が変わったけど、場の雰囲気も変わった気がする。・・・すごい！この人の一言でこんなにも変わってしまったなんて・・・こんな人とは思わなかった。

「ってことで」

そしてみんなが呆氣にとられているのを楽しんでいるかの様に、ニコツと私に向かって微笑んだ。

「この子は俺が貰ってくから。じゃあ皆さん、さよーなら〜！！」

彼がそう言い終わると同時に私の体がフワツと浮いた。

「へ〜〜〜〜！！？」

私を小脇に抱え去り行く彼を、店の人も親戚一同も全員呆然と見送っていた。

「これからよろしくね、波香ちゃん？」

またアノ、人を小馬鹿にした様な笑顔で言う。

「それよりもいい加減私のこと離してくれませんか？」

L e a f 1 出会いのかけら（後書き）

あゝもうちょっとハチャメチャにするつもりだったんですけど・・・
あまりなつてませんね。でもこの小説のギャグ要因が出て来てくれ
たので、これからはもっと明るくなるかと・・・何はともあれ楽し
んで読んで頂ければ幸いです。

Leaf 2 太陽がいつぱい

太陽の大切さ、気づいていましたか？

「美味しいか？」

・・・10回目。

「美味そうだよな〜！」

・・・5回目。

「あゝ俺の事は気にしないでいいぞ！全然腹なんか減ってないから
！！」

そう言つて、直後にお腹がなること・・・3回目。

彼は私を連れ去り、真つ赤な車（お前車の名前ぐらい見ただけで分かれよ。赤の車ついたらアルファロメオ以外有り得ないだろ？と彼に誇らしげに言われた）にポンツと人を放り投げフルスピードで逃げ出した。あまりにあつという間の出来事だったので、私は自分が何処まで連れて行かれたのかすらも分からなかった。そんな呆然としている私に、彼は何事も無かつたかの様に
「やっぱりまずは腹ごしらえだよな？」

と笑い掛け、きよろきよろしながら手頃なファミレスを探し始めた。
お願いだから前を向いて運転して下さい・・・

そうしてひげもじやの男と、礼服を着た女の子という奇妙な組み合わせの二人組が、このレストランに来店したのだ。最初に彼は私に
「何が食べたい？何でも好きな物奢つてやるぞ？」

と聞いてきた。私はたいして食欲がなかったのだ

「あつ、じゃあコーヒーを・・・」

と言ったのに

「何だ？その年でコーヒーか？んな大人ぶるなつて！何でも頼んで

いって言ったんだから、何でも頼めよ！」

お姉ちゃ〜ん注文よろしく〜と堂々と大声で叫んで、お客の目をすべてこちらに向けてから彼はケーキ・パフェ・パイ・アイスクリーム・．．．などなど私が頼んでもいない品を次々に注文した。こんなたくさん注文しといて払うお金が、このみすばらしい格好の何処にあるのだろう？と私を初め、このレストランにいるお客や店員さんの全員が思ったことだろう。あと結局彼はコーヒーを頼んではくれない、りんごジュースを頼んでいた。

私が疑いの表情でジトツと彼を見ていると

「なんだ？金ならあるから心配すんなって！」

と少し誇らしげに言われ、

「ホラッ！」

とテーブルには札束が放り出された。福澤諭吉が一枚、二枚、三枚・．．もう数えられないくらい大量にあった。私は目を見開き、驚いた。こんなもの見たのは初めてだったし、こんな人がこんな大金を持つているという事にも驚きだったからだ。．．．何故だか納得がいかない感が残る．．．そしてこの後、注文された品全てが私の為の物だという事に．．．この時はまだ気がついていなかった。

だがこんなにもお腹を空かし今にも涎を垂らしそうになっている人を目の前にして、食事が出来るほど私は神経図太くない。

「あゝ．．．これどうぞ」

私は近くにあったイチゴのパフェを彼に差し出した。

「いや．．．だから俺はいらねって．．．グキュルルルル」

「．．．．．お腹、鳴ってますけど．．．？」

あつ、顔が少し赤くなっている。ちよつとしてやつたり。

「．．．コホン．．．じゃあ．．．お言葉に甘えて．．．頂くとするかな」

そう言うやいなやにゅつと手が伸びてきて、一息にぺろりと食べられてしまった。そしてそれを皮切りに、次々に彼はテーブルに並ぶ

品々をあつという間に食べ尽くした。

「あゝ腹いっぱい」

一緒にげっぷもしていた。本当にこの人が大人だとはとてもじゃないが思えない・・・地が髭面な上に、サングラス、外では帽子まで被っていたのだから正確な年齢は元々分かっていなかったが・・・まあ、私が食事をしている最中にずっと笑いながら見ている時の顔は、悪戯好きの悪ガキの様でもあった・・・けど、どっちかっというところ・・・温かみを帯びた柔らかい眼差しで・・・まるで・・・「よし！腹ごしらえも済んだけど・・・ってさつきからココに皺寄ってるぞ？」

そう眉間を指で擦りながら言われた。

「えっ!？」

「なぐんかさつきからずっと考え込んでるようだけど？」

私はあまりの呆れと、怒りで一瞬我を忘れ・・・

「それはあなたのせいでしょう!？」

と気づけば自分でも不思議なくらい大声で、しかも立ち上がりながらそう叫んでいた。客も店員もみんな、私のことを目をまん丸くして見ていた。かあつと顔が一気に赤くなっていった。わ、私としたことが・・・こんなことぐらいで取り乱すなんて・・・

「ガアッはっはっはっはっはっ!!!」

目の前では大笑いされるし・・・もう・・・穴があつたらどこまでも潜り続けたい。

「やゝっぱりお前は夏流の子だ!。慌てると自分を見失うトコとかそっくり」

「・・・夏流って・・・まさか・・・お父さん・・・？」

「あーやつぱ知らなかった!?俺、君のオジサンなの。夏流の弟」
そんなビクリどつきり発言急に言われても・・・お父さんだつてそんな事一言も言っていなかったし。

「・・・じゃあ・・・何で・・・ちゃんとお葬式に出てくれなかった

の？」

自分の兄が死んだって言うのに、どうしてそんな平気な顔して・・・

「ああ・・・それはホントにすまなかったと思ってる」

珍しく声のトーンが下がった。

「あいつが・・・夏流が死んだって新聞で見たんだけど、仕事が多々終わらなくなつてよ・・・ホント悪かった。お前だけに辛い思いさせちまつて」

この人は信じれる。根拠も何も無いけど、私は直感的にそう思った。見た目も大金を持つてる辺りも怪しいけど・・・この人は強い何かを持っている。私が持つていない何かを。

「まあ、この俺が傍にいればもう辛い思いなんてさせねえから！安心しな！」

さつきとは打って変わって明るい声と笑顔。私には到底真似できない。

「俺達は今から『家族』だ！！」

そう言つて呆氣にとられている私に、手を差し出した。

「・・・かぞ、く？」

「ああ！これからは一緒に住んで、一緒に食べて、一緒に暮らすんだ。辛い事も、哀しい事も、もちろん楽しい事もぜんぶ分かり合える『家族』になるんだ」

思わず涙が零れて来た。一瞬にして失つたものを・・・もう手に入れないと思つていた大切なものが、また与えられるなんて。私は感謝の気持ちを込めて、差し伸べられた手を強く掴み、握手をした。

「だ、大丈夫か？」

私が急に泣き出してびっくりしたらしい。

「ええ。ありがとうございます」

「んな堅苦しい事言ふなつて！もう俺達は家族なんだから」

しかも照れてる。すぐに顔と態度に出てしまうみたいだ。この人だ
ってお父さんとそっくりじゃない。

私達はお会計を済ませてレストランの、快晴の空が広がる外に出
た。外がこんなに晴れていたなんて、今まで全然気がつかなかった。
私の心が曇っていたからかな？でももう大丈夫！太陽が現れたから。

「そういえば・・・私はあなたの事をなんと呼べばいいんですか
？」

この人が私の父親だとは・・・正直あまり思いたくない。

「あゝ・・・そうだな・・・キャプテンって呼べ！キャプテンがいい
！！」

・・・はい！？

L e a f 2 太陽がいつぱい (後書き)

主要キャラが全員出るまで結構かかりますね、この話(笑)しかも主人公の人格が未だにきちんと定まっていけないという・・・でも皆様に楽しんで読んで頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4160a/>

CLOVER

2010年10月28日06時54分発行